コメント四

〈薩琉軍記〉について

目黒将史

本学博士課程の目黒と申します。よろしくお願いします。〈薩琉軍記〉について、資料に沿いながら、小峯先生のご報告に付け加えるようなかたちでコメントしたいと思います。資料のⅠとⅡは物語の梗概と、〈薩琉軍記〉に描かれる合戦一覧になります。〈薩琉軍記〉の内容に関しましては、小峯先生のご報告にありましたので割愛させていただきます。Ⅲ「成立と伝来」については、時間の都合もあり詳しく説明できませんが、〈薩琉軍記〉は、享保一七年、一七三二年から天保四年、一八三三年あたりまでに、だいたい成立していただろうと推測されます。詳しくは、後ほど資料をお読みいただければ幸いです。

Ⅳ「諸本」に関して、みていきたいと思います。諸本については、小峯先生からすでにご報告がありましたが、少し付け加えさせていただきます。まず確認しておきたいのは、〈薩琉軍記〉は、資料Ⅰにあげた物語展開を持つ伝本群の総称であり、一つのテキストを指す呼称ではないということです。〈薩琉軍記〉の伝本については、資料の最後に「伝本一覧」を付けました。九番の『絵本琉球軍記』以外、すべてが写本です。ここでは本文確認が出来ているもののみ挙げましたが、これ以外にも所蔵のみ確認しているものもあり、全部で一二〇～一三〇本の伝本があることが判っています。

ここで挙げたように多数の伝本があり、その内容も多岐に渡っています。資料三ページの「諸本」を見ていただきたいのですが、〈薩琉軍記〉は大きく分類するとA系からE系の五系統に分類できます。A系とB系が〈薩琉軍記〉の中心となる諸本であり、C系は唯一の版本である『絵本琉球軍記』、D系は他の物語と〈薩琉軍記〉とが融合してできたテキスト、E系は琉球侵攻の後日譚を描くテキストです。D系とE系に関して言えば、諸本とするのは少し抵

抗がありますが、〈薩琉軍記〉の物語を完全に取り込んでいますので、ここでは諸本の中に入れています。A系とB系は、それぞれA系は一番の『薩琉軍談』から、B系は四番の『島津琉球合戦記』から、物語が増広していくことにより展開していきます。その物語の増広の一つの例として、琉球に関する知識の増幅が挙げられます。いくつか例をみていきたいと思います。

小峯先生のご報告の中で、琉球王が召還されるという記事がないという説明がありましたが、確かにA系、一番『薩琉軍談』や二番『薩琉軍鑑』、三番『琉球攻薩摩軍談』などには、琉球王を召還するという記事はありません。ただ、この物語が増広していくと、琉球王が薩摩へ訪れ、島津義弘と対面するというふうに展開していきます。五番の『琉球征伐記』になります。ここでは、琉球王が江戸へと連れられていきます。その途中で義弘と琉球王とが対面するのですが、そこで義弘が琉球王に言うのは、「この度の琉球への侵攻は私の意志ではない。この侵攻は、家康様からの侵攻せよという命に従い侵攻しただけだ」という論がなされます。これは主の命を重んじる考え方が反映したものだと思われますが、『琉球征伐記』全体でみられる考え方です。資料では「朱子学的思想」としましたが、こういう考え方が『琉球征伐記』には、たびたび出てきます。もう一例挙げてみると、佐野帯刀を殺した琉球の武将が投降してくる際に、仲間を殺された薩摩方は気色ばみますが、琉球の武将が語るには、「佐野帯刀を殺したことは本意ではない。琉球王の命令により殺したのだ。今、琉球王が行方不明になってしまったため、このように投降してきたのだ」と語り、薩摩方も納得します。ここでも、王と家臣との主従関係の倫理がうかがえます。このようなある種の朱子学的な思想が五番の『琉球征伐記』では語られています。

さらに発展して、七番の『琉球静謐記』になりますと、琉球王が義弘と対面した後、江戸へと連れて行かれます。ここでは松平伊豆守という人物が出てきて、朝鮮侵略に較べ、あっさりと侵攻が成功したことに関して、「琉球には武道というものがないのか」と、からかいますが、琉球王は、「琉球では親が死ねば子が、兄が死ねば弟が跡を継ぐので、古来より争いがない」と、跡目をめぐった争いを繰り返してきたヤマトを皮肉る言い回しをします。実際、琉球は万世一系ではないので、事実には反するのですが、これを聞いた松平伊豆守は赤面して退きます。資料にも書いた「教訓的内容」というのが、これにあたります。ここで登場する松平伊豆守は、知恵伊豆で有名な松平信綱のことでしょう。松平信綱譚の一つとしても機能しているかと思います。松平信綱は島原天草の乱とも関わってきますので、当時の

軍記のキーパーソンなのかも知れません。このように〈薩琉軍記〉の物語は、琉球王の召還記事だけでも、様々な展開をみせています。

ここまでA系の諸本についてみてきました。このA系の諸本『琉球静謐記』をもとに、他の物語を盛り込んで成立したのが、D系の一〇番『琉球属和録』です。資料のⅢにも書きましたが、『琉球属和録』は、本文の末尾に明和三年、一七六六年に茶飲み話として著したということが書かれていますので、これは明和三年の作品ということで間違いないかと思います。この『琉球属和録』の作者である堀麦水は、相当、琉球のことを勉強をしていまして、新井白石の『南島志』や西川如見の『華夷通商考』などを引いて、琉球について書いています。

一つ『琉球属和録』のオリジナルの内容について触れておきたいと思いますが、『琉球属和録』では、舜天が鯨を退治するという話があります。鯨の被害に困っていた住人を見かねて鯨を退治するときに、鯨を一人だけで追い返すのですが、そこで一陣の東風が吹き、舜天が神懸かり、鯨を睨み返すという内容が記されています。この東風が吹くことこそが、舜天の父である為朝のおかげだという語りになります。そこで琉球に為朝をまつる石碑を建てたところ、悪い鯨、悪鯨が来なくなった。その後、鯨は神の使いとして崇められ、琉球では今も鯨は食べないというような話がありまして、琉球における為朝への信仰というべきものが畏敬を含めて語られています。これは為朝伝承の一つとしても注目できるかと思われます。また琉球の鯨伝承を物語る資料としても注目されます。

こういった物語が増幅していく流れのなかで、諸本が様々につくられていったのが〈薩琉軍記〉なのです。この〈薩琉軍記〉の展開構造を明らかにしていくことの重要性について触れておくと、これは伝来や享受などの問題にもつながるかと思いますが、近世中・後期における、ヤマト側から見た琉球認識の一側面を明らかに出来ることだと思います。〈薩琉軍記〉は明らかに琉球を異国として認識しています。琉球を異国として認識するという、近世におけるヤマト側の琉球認識を明らかにしていく恰好の資料だと言えるでしょう。これについては、先ほど紙屋先生からご指摘があった時代背景なども含めながらの考察が必要になってくるはずです。

その異国としての琉球認識をうかがえるものに、地名についての問題があります。先ほど小峯先生からのご報告にもあったように、〈薩琉軍記〉に描かれる地名は、ほとんどが架空の地名です。しかし、架空だからと言って、これは琉球をまったく知らない者が書いたかというと、たぶん、

そうではなくて、琉球というものを異国として描くために、わざと、こういう名前にしていったと考えたほうがいいのではないかと思います。

それを表すものに「絵図」がありますので少し紹介しておきます。〈薩琉軍記〉に描かれる絵図は、琉球知識の増広により付加されていきます。これらの絵図は〈薩琉軍記〉における「琉球」という世界観をうかがう上で絶好の資料になるはずです。同じものを資料の四から六ページに載せましたが、前の画面を御覧ください。

始めに、立教大学小峯研究室蔵の『薩琉軍監』に描かれたものですが、これは薩摩の開聞岳を中心として描かれていまして、面白いところは、いろいろな琉球情報を盛り込んでいるところだと思います。左上に「琉球産」として、琉球の名物が描かれていたり、桜島の横には「橘相（みかん）の名産」と書かれていたり、種子島には鉄砲の由来のような話も書かれています。右下には和歌が書かれています。「薩摩潟夷すの郡のうつほ島是や筑紫の富士といふらん」でしょうか。「筑紫の富士」は開聞岳のことでしょう。この絵図における開聞岳の重要性がうかがえます。

注目すべきは、琉球のところに書いてある「程順則」でしょう。資料のⅢで書きましたが、程順則は、〈薩琉軍記〉には出てきません。なのに、ここには程順則という名が書かれています。これは何故かということを、ちょっと考えていまして、やはり、「琉球と言えば程順則だ」というような認識が、どこかにあったのではないかという思いに至っています。そのような連想が起こる土壌が何かあったのではないかと。そういった問題を抱えているという意味でも、この小峯研究室蔵の『薩琉軍監』は興味深い伝本であると言えるのではないでしょうか。

次に京都大学蔵の『島津琉球合戦記』ですが、資料には挙げなかったのですが、京都大学蔵『島津琉球合戦記』には、琉球図の他に、薩摩の図が載っています。資料では白黒になっていますが、実際は、この京都大学蔵の『島津琉球合戦記』には、淡彩の色が付いています。琉球の図ですが、本来は見開きになっているのですが、これは資料でいうと左側にあたります。絵の左側に「要浜灘番所、九州ヨリ此所迄百七十里」とあります。この「要浜灘」は「要渓灘」と同じ場所を指していまして、誤写によって変わったものだと思われます。ちなみに地名の呼び名についてですが、架空の地名ということもあり、本来どのように読むのか分かりません。ルビが付いている伝本もあるのですが、書写している当時の人も読み方が分からず、ルビが一定しないため、私が独自に音読した呼び名にしています。話は

ずれましたが、絵図に戻りまして、この要渓灘から、右上の千里城、右の下に移って虎竹城、米倉島、日頭山、乱蛇浦、下にいって高鳳門、左下、見開きの真ん中辺りに後詰城、中央に王城と、時計回りに地名を追って行くと、〈薩琉軍記〉の合戦の場面がたどれるというかたちになっています。右下に「セキヤ」「ハン所」と書かれていますが、これらも〈薩琉軍記〉において合戦が行われる場所になります。物語の内容通りですと、この関屋と番所は、右上にある日頭山にあるはずであり、絵図の位置と付合しないのですが、先ほども指摘したように、時計回りに、順次登場してくる地名を並べたために、このような現象が起こったものと思います。

この絵図で注目しておきたいことがもう一つありまして、左上「キカイガシマ」の下に「アマクサ」があるということです。これは島原天草の乱の「天草」だろうと思います。〈薩琉軍記〉には、当然というか、天草は登場しません。ですが、天草が島になって、しかも、薩摩の側にある。これは琉球侵攻と島原天草の乱とがつながってくるような認識があったことを示しているのではないかと思います。近世期の軍記の流布に関連する問題なのか、ちょっとまだ結論が出せませんが、異国琉球との合戦を描いている〈薩琉軍記〉の世界観の中に、天草が描かれていることは注意すべきでしょう。この『島津琉球合戦記』以外にも、絵図に天草が描かれているものがあります。それが『琉球属和録』なのですが、資料は四ページになります。『琉球属和録』では「種ヶ島」の下に「天草」があります。ですので、絵図に天草が登場することは、京都大学蔵『島津琉球合戦記』だけの問題ではないことが判ります。

『琉球属和録』の絵図は、薩摩から琉球までの渡航図になっています。先ほど、『琉球属和録』は琉球のことを勉強していると言いましたが、『琉球属和録』では、現在の沖縄で、見られる地名がかなり盛り込まれているのが分かります。特徴的なのは、中央に「首里」が書かれていることです。たびたび申し上げていますが、〈薩琉軍記〉で描かれている地名は架空のものです。その世界には「首里」は存在しません。ほとんどの〈薩琉軍記〉伝本では首里ではなくて「都」と書かれていまして、「首里」が出てくること自体が非常に珍しいのです。他にも現在うかがえる地名が多く、大まかな位置づけも現在の地図に近いかと思います。あくまで、「大まかに」でして、一つ一つ見ていくと、おかしい箇所はたくさんあります。運天が東側にあったりしますので。ですが、実際にある琉球という世界と、架空の〈薩琉軍記〉の世界観とが融合していくことは、非常に興味深いです。まさしく、架空の〈薩琉軍記〉世界を現実

化する行為とみなせるのではないでしょうか。

一つ飛ばしておりましたが、資料三ページ下段に挙げたのが、『絵本琉球軍記』です。この『絵本琉球軍記』に描かれる絵図にも、現在の沖縄の地名が垣間見られます。ちょっとこの地図では見にくいのですが、左側の真ん中右よりに「首里　王城」とあります。他にも右側の真ん中「東風平」などがそうです。『絵本琉球軍記』では、この東風平でも合戦が繰り広げられています。

この絵図については、以前指摘したことがあるのですが、『海東諸国紀』に描かれている絵図に似ています。印象批評的な感想だったんですが、『海東諸国紀』において、琉球の「国庫」が島として本島から離れていることが、〈薩琉軍記〉の世界観の中で描かれる「米倉島」につながるなど、〈薩琉軍記〉自体が、実際の琉球絵図、地図を見たことのある人、言ってしまえば、ある程度琉球に詳しい人物による創作ということは、想像に難くありません。

最後に、繰り返しになりますが、〈薩琉軍記〉の享受史を考えることは、近世中・後期における、ヤマト側から見た琉球認識の一側面をうかがう上で重要であると思います。〈薩琉軍記〉の描く琉球像は、まさしく異国であり、当時の異国観をうかがう資料としても重要視されるべきです。〈薩琉軍記〉というテキストが伝来してきたという歴史も、ヤマト側からの琉球史を考える上で考察されるべきでしょう。書物の伝来、享受の歴史の考察もまた歴史研究なわけです。以上で終わらせていただきます。

（本学文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程）